

ふるさと探訪

二月

二期作・二番出し



ふるさと探訪(わが町再発見)のバックナンバーによれば、二〇〇〇年(平成十二年)二月号は「生活の詩・積る雪二月」とあり、雪積る 窓にとんとん 孫の声(並人)で耐寒の故郷がよみがえる頭寒足熱のこのころ。

二月……「正月小なし、二月大なし」で、一月が小の月(二十九日)という例はなく、二月が大の

月という場合もないというが、平年の今年(二十八日)だから正に「二月逃げて行く」の二月である。元日の「酔わびに来る 二月かな(几重)もまた二月早やである。その二月が走って過ぎるので、薪ストーブの時代の東川では吹雪を突いて馬欄で薪山への伐採に精を出す二月でもあった。「元日は酔い過ぎて……。」とベコリ姿の「のんべえ」が朝早くから薪材運び。「まあ、ちよっと」のほろ酔い気分での雪山共同作業が続いたのである。さて、如月とは陰暦二月の異称であり、衣更着(更衣、衣替え)であるといい、夏のクールビズに對する冬のウォームビズにも通じるように、着膨(ふくら)まれて 盆栽愛(こぼれ)でし 老夫婦(枯舟)の暮らしも北国の二月なのかな……。

二期作……一年に二回、同一の作物を同一の耕地に作ることを二期作といってイネの二期作が普通であるが、現在では二毛作(同一の耕地に一年間に二種類の作物を作付けすること。畑のサツマイモとムギ、水田のイネとムギなど)も漸減されているようで、ビニールハウス栽培では「旬の味」がそれこそ「オールシーズン」になったのである。つまり、いつでもどこでも・だれでも好物がいたただける世の中となったのだから、二期作とか二毛作といった栽培そのものが無くなった状態ではなかるうかと思われる。

特に、品種改良やハウス栽培によつての季節感がうすれたり、貯蔵法や冷凍庫や冷蔵庫等の進歩によつての利便さが向上したり、そして今やグルメ一点張りの飽食時代となつたりして、これまで通りの二期作とはまたちがった繁忙極まりない生産活動が展開されている。

一番出し……昆布と鰹節で取つた「出し汁」の一番だしを取つたあと、更に煮だしたものが二番出しであり、みそ汁や煮物などに使うという。

一番だしなどは水くさいとかなんとかいう向きもあるようだが、けつこつ二番だしは美味しいので、捨てるのはまことに「もったいない」し、これを使った煮凝りはジャンケンで争って食べたもので、時には盗み食いをして両手に灸(やいと)の厳罰に処せられた時の涙は忘れられない。

ところで、二番煎じというのは二度煎じた茶や薬をいうことで、二番だしとはニュアンスが違うが、入れ替えない・前の繰り返して新味がないこと等からの「あれも、これも二番煎じ」といわばマシネリ化した物や事をいう場合にも使われている。

二月に因んでの二のつく言葉も非常に多いが、二階から目業(思うようにはいかななくて、じれったいこと)のたとえ。無理・無駄・斑(なま)なことをいう。二期制(一年を二期に分ける制度、たとえば前期と後期の学期制)・二人三脚などと枚挙に遑(た)がない。

ともあれ、雪国の二月は寒いのでインフルエンザに要注意の毎日をも思っていたら、ノロウイルスの猛威が食卓を襲つた今にあって、ひなまつり三月への楽しみへと向う二月を無事に過ぎなくちゃ……。

(元)郷土史編集専門員
尾池隆男

人口 / 7,725人 (前月比 11人) 男 / 3,693人 (前月比 7人) 女 / 4,032人 (前月比 4人)
世帯数 / 3,081戸 (前月比 2戸) 出生 / 4人、死亡 / 7人、転入 / 24人、転出 / 32人 【12月31日現在】
住民登録の手續き上、人口増減と出生・死亡・転入・転出の増減は一致しないことがあります。



本誌の印刷には、大豆インクを使用しています。また用紙には再生紙(100%)を使用しています。